

## 第 11 卷 編集後記

今年度は、新たに恵寿総合病院医学雑誌編集委員長の任に就くことになり、改めて一日一日の臨床の積み重ねとその振り返りの大切さをこれまで以上に感じることでできる一年となりました。まずは、辛抱強く論文完成へ向けて努力いただいた全ての著者の皆様、査読者の皆様、そして編集作業に関わってくれた、大成道広さん、長浦智里さん、森下毅事務部長に感謝申し上げます。

今回からの新しい企画として、董仙会 TQM (Total Quality Management) 発表大会の記録を掲載することになりました。様々な職場における取り組みの内容が紹介されましたが、発表テーマ名に用いられている「再評価」という言葉にこそ、臨床研究の土台にあるものだと感じました。

医療に携わる者にとって、「臨床研究はなぜ必要なのか？」という問いについて考えてみることはとても大切なことだと思います。「世界中から優れた臨床研究の論文や報告があるのだから、地域の一病院で新たな臨床研究を行うことに何の意味があるのだろうか？」「世界中から大規模な研究の結果がすぐに手に入るのだから、症例報告や対象例数の少ない報告にどんな意味があるのだろうか？」そのように感じたことはないでしょうか。今更言うまでもなく臨床におけるエビデンスは、日々の臨床における経験の検証（振り返り）から始まります。約 30 年前研修医時代に See one, Do one, Teach one と教えられた医療における研鑽のプロセスが、いつの間にか See one, Simulate one, Do one, Reflect one, Teach one に変わっていました。この Reflect（内省的振り返り）こそが EBM が定着するために不可欠な変化であり、症例報告の意義を示しています。

医療の向上・発展のためには、EBM が定着した今だからこそ「振り返り」を形にすること、時には「当たり前を再評価すること」を私たち医療者は忘れてはならないという思いを今回改めて再認識しました。そして、これらの取り組みが能登地域医療の未来へ向けた新たな認識と目標につながるものと期待します。

2023 年 3 月吉日

恵寿総合病院医学雑誌 編集委員長

新井 隆成